ドイツ語における受動態の形成について

武　市　　修

1．はじめに

ドイツ語は周知のように、英語、オランダ語、北欧諸語と同様、ゲルマン語に属する言語である。これらのゲルマン語はさらに歴史を遡れば、スラブ語、ケルト語、イタリック語等とともにインドヨーロッパ語族に属する。この事実の確認は、ラスク（Rasmus Kristian Rask）、ボップ（Franz Bopp）、グリム（Jacob Grimm）等の比較的歴史的方法による研究によって19世紀にようやく学問的に認知されるようになったドイツ言語学の成果である。

彼らは伝承された言語資料を比較検討し、現代ドイツ語から歴史的に時代を遡ってインドヨーロッパ語［族］にまで行き着いたのである。他のインドヨーロッパ諸語からゲルマン語が区分されるのは、

1 音韻上の独自の変化［特に子音に関しては第一次子音推移］
2 母音交替（Ablaut）による強変化動詞の体系化と歯音接尾辞による弱変化動詞過去形の形成
3 形容詞の弱変化形の形成
4 単語のアクセントの語根［第一母音］への固定

等による。何よりもアクセントの固定は、文法的、統語的機能を担っていた語尾の弱化を招き、その結果ゲルマン語では、一語で文法的、統語的機能を表わしていたインドヨーロッパ語の総合的な（synthetisch）言語体系が崩れ始め、人称代名詞、冠詞、前置詞、助動詞を用いた分析的な（analytisch）傾向が次第に強まる。

次ページの表は、Mann の意味で新高ドイツ語（Nhd.）の Bräutigam の -gam に残っている、弱変化 -n 語幹の名詞の語形の変遷を示したものである。[1] インドヨーロッパ語では元来、多くの単語は語根、語幹、語尾の

三部分から成っていたが、この表から分かるように、アクセントの語根への固定化に伴って語尾は次第に脱落する。今日のドイツ語や英語成立以前のゲルマン語段階のゴート語（Got.）では、それはまだかなり残っているものの、古代英語（Ae.）と古高ドイツ語（Ahd.）では複数2格にしかなく、中高ドイツ語（Mhd.）ではそれも消失し、その上、元来語幹であった部分がすべて e に弱化し語尾化している。

		Lat.	Got.	Ae.	Ahd.	Mhd.
Sg.	Nom	hom-o-	gum-a-	gum-a-	gom-o-	gom-e
	Gen	-in-is	-in-s	-an-	-in-	-en
	Dat	-in-i	-in-	-an-	-in-	-en
	Akk.	-in-em	-an-	-an-	-un-	-en
Pl.	Nom	-in-es	-an-s	-an-	-un-	-en
	Gen.	-in-um	-an-ê	-en-a	-ôn-o	-en
	Dat.	-in-ibus	-am-	-um-	-ôm-	-en
	Akk.	-in-es	-an-s	-an-	-un-	-en

受動表現に関しては、ゲルマン語の段階ではまだ部分的に総合的表示が残っていたようである。例えば、ゴート語ではまだ直説法現在と接続法現在にその形が見られるが、[2] 過去時称ではすべての人称形で Nhd. の werden に当たる wairþan および sein と同義の wisan と過去分詞によって受動表現を代用するようになる。[3]

Ahd. ではゴート語に残っていた総合的な受動表示はすべて消滅し、もっぱら werdan, wesan (sîn) と過去分詞による複合的な代用表現が用いられるようになる。そして Ahd. から Mhd.、初期新高ドイツ語（Frühnhd.）の長い経過の中で、werden、sein が動詞本来の意味を失って完全に助動詞化し、さらに完了と未来の時称表示の形態的区別を行なうことにより、Aktiv に対する Passiv という能動受動の体系が確立されるのである。

この小論では、今日、動作受動（Vorgangspassiv）と状態受動（Zustandspassiv）として区分される表現形式が、歴史的にどのような経緯を経て文法化されてきたのか、その過程を辿るとともに、『中高ドイツ語文法』*Mittelhochdeutsche Grammatik* 第20版（以下『中高ドイツ語文法』

と略記）における記述の問題点を明らかにしたい。[4]

2. werden と過去分詞

過去分詞は元来、過去形の語幹をもとに作られた動詞の働きを保持した形容詞（Verbaladjektiva）であり、動詞の表わす行為、事象が完了した状態を示し、自動詞の過去分詞は能動の意味を、他動詞の過去分詞は受動の意味をもつ。そして形容詞として述語的にも付加語的にも用いられ、本来は時称（Tempus）とも、態（Genus verbi）とも直接的なつながりはなかった。ところが総合的言語構造が維持しがたくなるにつれて、それが haben と、自動詞の一部はまた sein とともに能動の完了を、また werden, sein とともに受動の現在と過去を表わすのに用いられることになる。

未完了相動詞の過去分詞はゴート語から今日まで明らかに現在の意味をもっており、„meine geliebte Frau“ は „die Frau, die früher von mir geliebt wurde“ の意ではなく、„die Frau, die von mir jetzt geliebt wird“ の意であり、„ein geplagter Mensch“ は „jemand, der früher einmal geplagt wurde“ の意ではなく、„jemand, der jetzt andauernd geplagt wird“ の意であり、„ein besetzter Platz“ は今なお „besetzt“ である。[5]

完了相動詞の過去分詞は、ある先行する、すでに完結した行為から生じた状態が継続していることを表わす。„die angekommenen Gäste“ は「すでに到着して今そこにいる客」のことをいう。ドイツ語では必ずしもすべての動詞を完了相動詞と未完了相動詞に明確に分類することはできず、多くの動詞は形態上の区別なく完了的にも未完了的にも用いられる。例えば „ein aus dem Wasser gezogener Kasten“ は完了の意味であり、„ein von vier Pferden gezogener Wagen“ は現在の意味であるが、これらの動詞は大部分完了的な意味で現われる。過去分詞を時称的意味と態の意味から分類すれば、

1 完了相動詞の他動詞は受動的完了
2 未完了相動詞の他動詞は受動的現在
3 完了相動詞の自動詞は能動的完了

を表わす。[6]

werden は本来 „eine Form/Beschaffenheit annehmen, entstehen“ の意味の本動詞であり、それが行為の完結した状態を表わす完了相動詞の過去分詞を述語形容詞にとって、「そのような状態に入ること」、「そのような状態になること」を意味した。つまり „(Christ) wirdit arslagan“ は „er wird ein Erschlagener sein“ の意味であった。[7] 従って、werden が上述のように受動表現に転用される時、もっぱら未だ実現されていない未来の内容を表わした。次の例はひとつの werden が本来の始動相の意味の本動詞と受動の助動詞のふたつの機能を兼ねたものである。

Er se joh himil wurti joh erda ouh so herti,
ouh wiht in thiu gifuarit, thaz siu ellu thriu ruarit:
(O. II. 1, 3–4. 下線は筆者、以下同様)
海と天とそしてまた非常に固い地が生じ、
また、それら3つのものに棲息するものが生み出される前に、

wurti は「生じる」の意味と過去分詞 gifuarit とともに受動で「生み出される」の両方に用いられた接続法過去形である。

このような werden＋過去分詞は未来的な意味を残しながらも、また、一般的に通用する現在の意味をも表わすようになる。例えば、

Thiz cunni diuuolo ni uuirdit aruuorfan
noba thuruh gibet inti fastun. (Tat. 92, 8)
この種の悪霊は祈りと断食によらなければ追い出されない。

さらに、現在の具体的な状況をも表わして、

uuanan ist thesemo thisiu spahida inti solihiu megin, thiu
thuruh sino henti uuerdent gifremit? (Tat. 78, 2)
この人はその手によって示されている
このような知恵と力をどこから授かったのか。

この werden 形はオトフリト (Otfrid von Weissenburg) の『総合福音書』

Evangelienbuch では継続相の動詞の過去分詞とも結んで、

Ni lag Johannes noh tho in war in themo karkare thar,
tho thiz ward sus gibredigot fon imo al so giredinot.
(O. II. 13, 39f.)

このことがそのように教えられ、彼によってそう話されていた時、
ヨハネはまことにまだそこで獄につながれてはいなかった。

『タツィアン』*Tatian* でも未完了相の動詞との結び付きが見られ、ベハーゲル (Otto Behaghel) によれば、[8] この werden 形はノトカー (Notker Labeo) で無条件に現在的用法で用いられ、特に受動の未来を表わそうとする時、scal (=soll) が用いられることすら試みられるようになった。werden 形はこのようにして次第に動詞本来の意味から離れて事象を表わす受動としての機能を強めてきた。

以上 Ahd. における werden 形の迂言的受動表現を主としてベハーゲルに拠りごく大雑把に辿ったが、言語はそれほど急激に変化するものではなく、この結び付きは一気に文法化されたわけではない。後にも触れるように、本来の古いニュアンスがさまざまな形で残っている。次に少し長くなるが、過去時称でこのようなさまざまな意味の werden 形が見られるオトフリトの一節を見てみよう。

Tho wurtun sie gidruabte zwivalemo muate,
ni giloubtun thesa redina thuruh thes herzen frewida.
Ni det er thes tho bita, hiaz ruaren sina sita;
sie henti ouh sino ruartin, thaz sie ni zwivolotin.
Thaz deta druhtin thuruh thaz want er giwuntoter was,
thaz sie alleswio ni datin, bi thiu nan thoh irknatin.
Want er ward thar giwaro giwuntot filu suaro,
zi ferehe gistochan; iz ward thoh sid girochan.
(O. V. 11, 19–26)

その時彼らは内心疑っていたのでうろたえた。
心では喜んでいたが、この話をまだ信じられなかったのだ。

そこで主はためらうことなく彼の脇腹をさわるように
また彼の手もさわるように命じられた、彼らが疑わないために。
主がそうおさせになったのは、彼が傷ついていたからこそであり、
彼らが他のやり方でなく、その傷によって主を認めるためであった。
まことに主はそこをひどく傷つけられ心臓まで刺し
貫かれておられた。しかしその行いは後に罰せられることになった。

一行目の „gidruabte“ は他動詞 „gidruaben“ の過去分詞で、述語形容詞として男性複数1格の語尾が付いているが、wurtun とともに「狼狽させられた」の意であり、今日の werden 受動の過去に当たる表現である。5行目の „giwuntoter was“ は過去分詞に男性単数1格の語尾が付き「傷つけられていた」の意であるが、これは状態受動というよりはコプラ＋形容詞の性格が強い。7行目の „ward giwuntot, gistochan“ は過去分詞に語尾が付かず、今日の werden 受動の過去と同じであるが、コンテクストからすると、明らかにそこで話題になっている事柄より以前に行なわれた行為であり、時称は今日の過去完了に当たると思われる。最後の „ward girochan“ は今日の動作受動と同じ用法であろう。

3. wesen (sîn) と過去分詞

ベハーゲルは、受動の迂言表現の本来的なものは werden によるものであって、Ahd. の wesan と過去分詞の結び付きの多くは上例のように受動ではなく、動詞の表わす行為、事象の結果の描写であるとした。[9] wesan＋過去分詞は多く見られ、確かにこれをコプラ＋形容詞とするか、受動の迂言表現と解するかは決め手のないケースも多い。しかしこの結合は結果を表わす状態表現から長い道程を経て状態受動へと文法化されてくるのであり、我々はこれらの結び付きを受動の迂言表現という観点からその現象を辿ってみよう。

この結び付きは過去分詞で表わされる行為がすでに完了してあるということから、Ahd. では先ず、今日の受動の完了に当たる内容を表わす。

Ni forihti thir, biscof, ih ni terru thir drof;
wanta <u>ist</u> gibet thinaz fon druhtine <u>gihortaz</u>, (O. I. 4, 27f.)

恐れるな、祭司［ザカリヤ］よ。私は決しておまえを害しない。
おまえの祈りが主に聞きいれられたのだから。

ヴァランタン（P. Valentin）によれば、[10] 現在時称では werden は Ahd. においては本来の未来的な意味をまだ強く残しており、『イシドール』 *Der althochdeutsche Isidor* ではラテン語原典の未来に係わる内容の個所の翻訳に用いられている。従って、未来の意味が強調されない現在の事象（Vorgang）には Ahd. では werden と同じように、sîn の現在形が用いられることはエロームスも指摘している。[11] 例えば、『タツィアン』で、

al daz in mund inget, in uuamba uerit inti
in uzgang uuirdit gisentit; (Tat. 84, 8)
口に入るものはみな腹の中に入り、そして出口から放り出される。
Giuuelih boum thie thar ni tuot guotan uuahsmon,
ist abafurhouuan inti in fuir gisentit. (Tat. 41, 7)
よい実を結ばないどんな木も切り倒され火の中に投げ込まれる。

そして過去時称でも状態の開始を強調しない時には明らかにwerdenの代わりにwesanが用いられる。

Thô ther heilant uuas gileitit in vvuostinna
fon themo geiste, (Tat. 15, 1)
それからイエスは御霊によって荒野に導かれた。

また、受動の不定詞ももっぱら sîn 形が用いられる。

sie uuanent thaz sie in iro filusprahhi sin gihorte. (Tat. 34, 3)
彼らは言葉を多くすれば人に聞かれると思っている。

ベハーゲルによれば[12] 受動表現としての wesan＋過去分詞はゴート語において現在時称ではまだ見られない。過去時称では warþ＋過去分詞は常に始まりつつある行為を表わし、過去分詞は完了相動詞のそれである。

これに対しwas は、(1)未完了相動詞の過去分詞とともに過去に継続している行為を表わし、(2)完了相動詞、ときに未完了相動詞の過去分詞とともに過去に生じつつある行為を表わす。しかし(2)の完了相動詞の過去分詞との結び付きの場合 warþ の受動とほとんど変わりがない。この結合は Ahd. では現在時称にも見られるが、彼はこれをラテン語の影響で本来のドイツ語の語感にはそぐわないものとする。

しかしグレンヴィク（Ottar Grønvik）によれば、[13] 古代ノルウェー語にもゴート語にも、さらに古代英語にも was＋過去分詞形が受動の状態をも事象をも表わす例が多数見られ、従ってドイツの学者が言うようにドイツ語でもこの結び付きは元来、異質なものではない。ただ werden 受動が Vorgangspassiv として定着するにつれて、wesen 受動が次第に Zustandspassiv の役割に限定されるようになったのである。英語ではむしろ逆に weard(＝ward)形がこれによって駆逐され、weordan＋過去分詞形を14世紀以来失い、be 動詞＋過去分詞形がもっぱら受動を表わすようになった。そして新たに始動相を表わすのに、„get slapped“ „get killed“ 等のように get＋過去分詞を用い、また、„the house is build“ に対し „the house is being build“ で進行相を表現する形式を生み出したのである。

要求や目的、願望を表わす接続法現在の受動文では、その内容がまだ実現していない行為を表わすので、元来は werden が用いられ、Mhd. でも

alsus werde iu benomen / al iuwer swære. (Iw. 5920f.)
同じようにあなたの苦しみが / すべて取り除かれますように。

のような用例が見られるが、これは稀な例であり、多くは Ahd. からすでに次のように sîn が用いられる傾向がある。

fater unser thu thar bist in himile,
si giheilagot thin namo,[14] (Tat. 34, 6)
天にまします我らの父よ、あなたの御名が崇められますように。

これは、要求する内容が未来のことであっても、すでに実現されてあって

ほしいと願う気持ちを強く表わそうとするために完了した形を用いると考えられる。従って „Gelobt sei Christus!“, „Seid mir gegrüßt!“, „Der Koffer soll fest geschlossen sein.“ のように、今日でも要求や命令を表わす受動にはふつう sein が用いられる。次の文は要求を表わす sîn の接続法現在で、受動と能動が同時に表わされている珍しい例である。

Mit thiu si ih io bifangan joh fianton ingangan, (O. V. 3, 17)
それ［十字架］によって私が常に周りを守られ、
敵たちから逃れていますように。

4. 受動形と時称

ドイツ語には元来、動詞単独で表わせる時称は現在と過去のふたつしかなく、そのため例えば、前綴 gi-(ge-) を現在形の動詞に付けて未来を、過去形の動詞に付けて完了の意を表わすなどの工夫がなされたが、やがてさまざまな時の段階を区別するのに助動詞を用いた複合時称によって次第に時称体系が整備されてくる。それは先ず、haben, sein を助動詞とした能動の完了時称から始まる。この場合も受動の迂言表現と同様、過去分詞の形容詞（名詞）的性質を利用し、元来状態表現であったものが完了表現に転じたのである。つまり、„er hat es gefunden“ は „er hat es als gefunden“ の意であり、„er ist gestorben“ は „er ist ein Gestorbener“ の意であった。このような迂言表現の萌芽は 8 世紀に見られ 9 世紀の終り頃にはかなり用いられるようになり、10世紀に定着した。[15] 例えば、『タツィアン』とオトフリトに現われる「habên およびそれと同義の eigan＋過去分詞」、「sîn＋自動詞の過去分詞」の結び付きは次のようである。[16]

	『タツィアン』	オトフリト
habên＋過去分詞	4（1＋3）	25（25＋0）
eigan＋過去分詞	0	16（15＋1）
sîn＋過去分詞	7（4＋3）	25（22＋3）

かっこ内の下線の数字は過去分詞に語尾の付いた内数である。語尾の付いた形はまだ過去分詞の形容詞としての性質を示しているが、それもオトフリトでは少なくなり、受動の場合と同じようにこの結び付きが完了時称として定着しつつあると考えられる。

もっとも、次に示すようにそのような完了形と並んで、前綴 ge- を付けた形も併存し、逆に助動詞を用いた完了の形で単なる現在や過去を表わしたり、過去完了に当たるものを単なる過去で表わしたりしている。従って、これらの助動詞による迂言形はMhd.でもまだ完了時称として完全に確立していたわけではない。

der künec sîn friunt der frâgte in dô,
wie ez im ergangen wære. (Trist. 8236f.)
彼の友である王はそこで尋ねた、
彼の身にどのようなことが起こったのかを。
si jâhen, sine gefrieschen nie
solhes wunders gemach. (Trist. 8250f.)
彼らはそんな奇跡に似たようなことは
未だかつて聞いたことがないと言った。
dô dû von ir schiede, zehant si starp. (Parz. 476, 26)
おまえが彼女［母］の許を去ったあとすぐに彼女は亡くなったのだ。

受動の場合は形態的に完了時称の形成が遅れ、Ahd., Mhd. ではまだ現在と過去のふたつしかないため、それらが他の時称の表現をも兼ねて用いられた。wesen (sîn) の現在形と他動詞の過去分詞で現在完了を表わしたことは先に示したが、werden の過去でも現在完了を表わして、

daz ich ie wart geborn, / daz riuwet mich vil sêre,
私は生まれてきたことがとても悲しい。 (Nib. 854, 2b－3a)

また wesen と werden が過去で過去完了に当たる時を示し、

Thô Herodes gisah uuanta her bitrogan uuas fon then magin,

ヘロデ王は博士たちに騙されたことを知った時、　(Tat. 10, 1)
nû disiu rede wart volbrâht,
dô sprach diu herzoginne, (Parz. 730, 14f.)
さてこの件が取り決められると、
王妃は言った。

werden 受動の過去が未完了相動詞でも過去完了に当たる用法で、
Nû diz allez geschach,
daz sîn genist und sîn vart
sêr und wol belachet wart,
dô frâgeten sî'n genôte
von der maget Îsôte. (Trist. 8252－56)
さて彼の傷の治癒と彼の旅の
ことでひとしきり
大笑いされたあと、
皆は彼に乙女イゾルデに
ついてしきりに尋ねた。

wesan＋過去分詞はまた、内容が未来に係わる場合には未来完了を表わす。そしてそれは Mhd. にも見られる。

„Laz sia", quad ther meistar, „duan thiu werk thiu si bigan,
thaz siu iz nirfulle nu thiu min; ni muaz si, sih bigraban bin.
(O. IV. 2, 31f.)
「彼女が始めたことをさせておきなさい」と主は言われた。
「私が葬られてしまえば、彼女はもうそうはできないのだから。
so ist maneger geheilet, der nu vil sêre wunder lît.[17]
そうすれば、今重い傷を負って臥っている　(Nib. 257, 4)
多くの人たちも回復しているでしょう。

このような未来完了に当たる用法はさらに Nhd. にも残っている。

denn sie glaubte tatsächlich, daß mit Ausdauer
alles gewonnen sei (aus S. Lenz: *Das selbische Mädchen*)

ところで worden を用いた受動の完了形はすでに『パルツィヴァール』に1例見られる。

dô was ez ouch über des jâres zil,
daz Gahmuret geprîset vil
was worden dâ ze Zazamanc, (Parz. 57, 29−58, 1)
ガハムレットが大いに
ツァツァマンクで称賛を
博してから1年以上になった。

しかしこれは非常に稀な例であり、その後いくつかの散発的な例を除くと、[18] ようやく15世紀のコンスタンツ公会議の記録に直説法現在と過去、接続法過去でも worden 形が現われ、16世紀にはいってルター（Martin Luther）以後散見されるようになる。

sîn 受動は werden 形に比べて上で見たように古いドイツ語では多く用いられ、『タツィアン』では直説法の過去で100対70、現在では170対100である。Mhd. でもその傾向は続き、ヴォルフラム（Wolfram von Eschenbach）でも全体で738対606と sîn 形の方が多い。[19] しかし werden 形が今日のように継続相の意味でも用いられることが定着し（例えば „J. Reuchlin, der damals für einen gelehrten Mann gehalten ward“「当時教養人とみなされていたロイヒリーン」)、動作受動として文法化されるにつれてこの割合は変わり、現代ドイツ語では両者は逆転しているとのことである。[20] この過程は14、15世紀の間に進み、16世紀に定着する。また、未来時称も16世紀中頃に用いられ始めた（„so wirst du gewisslich größlich daraus gebessert werden“)。このような経過を経て17世紀の中頃（『ジンプリツィシムス』*Simplizissimus* の頃）に werden と sein による受動体系が、今日の姿に極めて近いものになるのである。[21]

5. おわりに

Ahd.における受動の迂言表現はMhd.でも原則的にそのまま受け継がれるが、ここで『中高ドイツ語文法』に関して一言触れておきたい。これは、パウル（H. Paul）が1881年に著した『中高ドイツ語文法』がその後何度か改訂増補されたものである。

パウルのこの文法書は1929年第12版でベハーゲルによって文章論（Satzlehre）が改められた。そしてシュミット（L. E. Schmitt）、ミツカ（W. Mitzka）を経て、さらに1969年第20版でシュレーブラー（I. Schröbler）の手でこの文章論が大幅に書き変えられ、この部分を Syntax として装いを一新した。この改訂は現代語の視点から Mhd. の統語現象を見直したもので非常に斬新な試みであった。

受動に関してもシュレーダー（W. Schröder）によって提議された分類を受け入れ、Nhd.の見方に従って状態受動（Zustandspassiv）と動作受動（Vorgangspassiv）に類別して説明するが、同書でも認めているとおり、sîn 形の受動の用例が、必ずしもすっきりと割り切れず、Nhd. の基準を Mhd. に当てはめるのは無理があるように思われる。なお、1982年第22版のグロッセ（S. Grosse）による改訂を経て、1989年に第23版でヴィール（P. Wiehl）とグロッセによってこの Syntax が従来の12章から7章に整理され組み直されたが、実質的にはほとんどをシュレーブラーに負っているのに彼女の名を削除したのは不当な扱いであろう。

最後にこの『中高ドイツ語文法』に挙げられたいくつかの用例を検証し、Mhd. の受動分類の疑問点を明らかにしたい。次の例は werden 受動の接続法過去である。

man sagt von sîner vrümekheit,
ezn <u>wurde</u> rîter nie <u>verseit</u>
swes er in ie gebæte.　　(Iw. 4561－63)
彼のすぐれた徳について人の言うには
どんな騎士も彼に頼んだことは何であれ
断られたためしがないということである。

シュレーブラーはこれをベハーゲルの解釈に反対して „man sagt ..., es würde einem Ritter nie versagt werden, worum er bäte oder: bitten würde“ と未来に訳している。[22] しかしここには接続法過去が過去の事柄を表わした古い時称の意味が残っており、ベハーゲルの言うとおりこれは過去の事柄を表わしていると見る方が自然である。二人の訳者も接続法の過去時称で訳している。[23]

ちなみに、Ahd., Mhd. では接続法によって示される副文とその上位文との間には原則としてまだ時制の一致が見られた。例えば、次のふたつの例は否定と接続法による除外文であるが、上位文が現在の場合は副文が接続法現在、上位文が過去の場合は副文が接続法過去になっている。

jane vihtet iu hie niemen mite,
Der leu enwerde in getân. (Iw. 6696f.)
まことに獅子が中へ閉じこめられない限り、
ここではそなたを相手に誰も戦いはしない。
wander sâ wol weste,
ern beschirmte sînen brunnen,
er wurd im an gewunnen. (Iw. 2544－46)
なぜなら彼がその泉を守らなければ、
奪われてしまうだろうという
ことが彼にはすぐによく分かったから。

次の例はヴァルター (Walther von der Vogelweide) の Minnesang の一節であるが、シュレーブラーはこれを一応状態受動のところに分類し、無時間的で perfektivisch でないとして „wie du vergessen bist“ という訳を添えている。[24] しかし、これは今日でいう状態受動ではなく完了を表わしていることは、二人の訳者の Nhd. 訳からも明らかである。[25]

Ierusalêm, nû weine, wie dîn vergezzen ist! (Wa. 78, 15)
エルサレムよ、さあ嘆くがよい。お前のことが
何とまあすっかり忘れ去られてしまったことか。

次の例も状態受動として分類され、„sie [die Minne] ist [im vorliegenden Fall] an die richtige Adresse gerichtet“ という訳が添えられているが、[26] これは大いに疑問である。

sie ist rehte zuo gekêret. (Iw. 1590)

グリムはその『ドイツ語文法』*Deutsche Grammatik* で sein 支配の自動詞の項目にこの例を挙げ、„sie hat sich an den rechten Ort begeben“ と訳している。[27] kêren は元来他動詞であるが、本来の目的語が省略され、Mhd. では自動詞化してよく用いられ、その場合、完了時称では稀に haben もとるが、大抵 sein 支配である。Ahd. にもすでにその例が見られ、『イーヴァイン』には他に 3 個所 sîn をとった自動詞 kêren の現在完了の例があり、辞書にもそのような用例が挙がっている。従ってここも受動ではなく、能動の完了と解すべきであろう。[28]

以上『中高ドイツ語文法』の分類について問題の個所をごく簡単に例示したが、それ以外にも単純に割り切れないケースもあり、werden, sîn とも本来の意味を失って受動の助動詞として文法化されるのは、それほど急速簡単に進んだわけではない。例えば、werden＋過去分詞は Mhd. で werden 本来の起動相的な意味をある程度は保持しながら次第に受動の迂言表現として文法化されていったと見ることができようが、しかしそれでも前ページの『イーヴァイン』からの 2 例にも見られるように、エロームスによれば、[29]『パルツィヴァール』ではこの現在形の用例中約70パーセントには何らかの未来の意味が含まれているということである。彼は動作様態、アスペクトの観点から『パルツィヴァール』の証例を分類した結果、Mhd. の werden 受動は Nhd. のような動作受動ではなく、状態開始受動 (Zustandseintritts-Passiva)、あるいはそれよりも変形受動 (Transformativ-Passiva) であると言う。[30] いずれにしても Mhd. の受動の現象については動作様態および時称の面から、さらには、今回は考察できなかったが、韻律の面からも総合的に見直すことが必要であろう。

主要参考文献および引用原典

Behaghel, Otto: *Deutsche Syntax*. Band II. Heidelberg 1924.

Braune, Wilhelm: *Gotische Grammatik*; 16. Auflage, neu bearbeitet von E.A. Ebbinghaus. Tübingen 1961.

Erdmann, Oskar: *Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otfrids*. Halle 1874-76 [Nachdruck Hildesheim/New York 1974].

Eroms, Hans-Werner: *Zum Passiv im Mittelhochdeutschen*. In: K. Matzel/H.-G. Roloff (Hrsg.), *Festschrift für Herbert Kolb zu seinem 65. Geburtstag*. Berlin/Frankfurt/New York/Paris 1989, S. 81-96.

Eroms, Hans-Werner: *Zur Entwicklung der Passivperiphrasen im Deutschen*. In: *Neuere Forschungen zur historischen Syntax des Deutschen*. Tübingen 1990 (Reihe Germanistische Linguistik 103). S. 82-97.

Gerdes, Udo / Spellerberg, Gerhard: *Althochdeutsch-Mittelhochdeutsch*; 6., durchgesehene und ergänzte Auflage. Frankfurt am Main 1986.

Grimm, Jacob: *Deutsche Grammatik* IV. Gütersloh 1898. Hrsg. v. G. Roethe und E. Schröder [Reprografischer Nachdruck Hildesheim 1967].

Grønvik, Ottar: *Über den Ursprung und die Entwicklung der aktiven Perfekt- und Plusquamperfektkonstruktionen des Hochdeutschen und ihre Eigenart innerhalb des germanischen Sprachraumes*. Oslo 1986.

Kelle, Johann (Hrsg): *Otfrids von Weissenburg Evangelienbuch. Text Einleitung Grammatik Metrik Glossar*. Band III [Nachdruck der Ausgabe 1881. Aalen 1963].

Paul, Hermann: *Mittelhochdeutsche Grammatik*; 19. Auflage, bearbeitet von W. Mitzka, 2. Druck, Tübingen 1966; 20. Auflage von Hugo Moser und Ingeborg Schröbler. Tübingen 1969 (=Schröbler); 23. Auflage, neu bearbeitet von Peter Wiehl und Siegfried Grosse. Tübingen 1989.

Piper, Paul (Hrsg): *Otfrids Evangelienbuch. Mit Einleitung, erklärenden Anmerkungen, ausführlichem Glossar und einem Abriss*

der Grammatik. II. Theil: Glossar und Abriss der Grammatik. Freiburg i.B. 1887.

Tschirch, Fritz: *Geschichte der deutschen Sprache*. 1. Teil; 3., durchgesehene Auflage, bearbeitet von Werner Besch. Berlin 1983 (Grundlagen der Germanistik 5).

Valentin, Paul: *Zur Geschichte des deutschen Passivs*. In: *Das Passiv im Deutschen, Akten des Kolloquiums über das Passiv im Deutschen*, Nizza 1986 (Linguistische Arbeiten 183). Hrsg. v. Centre de Recherche en linguistique Germanique (Nice). Tübingen 1987, S. 3-15.

Die Gotische Bibel. Herausgegeben von W. Streitberg. Heidelberg 1919.

Tatian. Herausgegeben von Eduard Sievers; 2., neubearbeitete Ausgabe [Unveränderter Neudruck Paderborn 1966] (=Tat. 114, 2 usw.).

Otfrids Evangelienbuch. Herausgegeben von Oskar Erdmann; 6. Auflage, besorgt von Ludwig Wolff (Altdeutsche Textbibliothek 49). Tübingen 1973 (=O. V. 6, 41 usw.).

Hartmann von Aue: *Iwein*. Herausgegeben von G. F. Benecke und Karl Lachmann; 6. Ausgabe [Unveränderter Nachdruck der 5., von Ludwig Wolff durchgesehenen Ausgabe]. Berlin 1966 (=Iw.).

Das Nibelungenlied. Nach der Ausgabe von Kart Bartsch, herausgegeben von Helmut de Boor, 20., revidierte Auflage. Wiesbaden 1972 (=Nib. 254, 4 usw.).

Wolfram von Eschenbach: *Parzival*. Herausgegeben von Albert Leitzmann; 7. Auflage, revidiert von Wilhelm Deinert (Altdeutsche Textbibliothek 12, 13, 14). Tübingen 1961-65 (=Parz. 26, 3 usw.).

Gottfried von Strassburg: *Tristan*. Nach der Ausgabe von Reinhold Bechstein, herausgegeben von Peter Ganz (Deutsche Klassiker des Mittelalters, Neue Folge Bd. 4). Wiesbaden 1978 (=Trist.).

注

1 武市　修「ドイツ語の格体系の変遷について」『神戸女子薬科大学　人文研究』第5号　昭和52年　42ページより。

2 ドイツ語の歴史を遡る場合、今日のドイツ語と直接のつながりを保持しているのは Ahd., 古代低地ドイツ語（And.）までである。それ以前のゲルマン語と呼ばれる言語段階では大別して東ゲルマン語、西ゲルマン語および北ゲルマン語の三つの言語グループに分けられ、ドイツ語の直接の祖先は西ゲルマン語に属するものであるとされる。しかし、この言語グループからはまとまった言語資料が残されておらず、この段階の資料として明確な形で伝えられているのは、4世紀後半ウルフィラによってギリシャ語から東ゲルマン語に属するゴート語に翻訳された聖書のみである。それ故に、我々は Ahd. 以前の言語状況を探る場合ゴート語に頼らざるを得ないが、それでもある程度までは正確な姿を知ることができると考えられている。次の表は Nhd. の nähren に当たるゴート語 nasjan（heilen, retten の意）の直説法と接続法現在の能動形と受動形を示したものである。

Aktivum:	Präs. Ind.	Optativ	Passivum:	Präs. Ind.	Optativ
Sg. 1.	nasja	nasjau	Sg. 1.	nasjada	nasjaidau
2.	nasjis	nasjais	2.	nasjaza	nasjaizau
3.	nasjiþ	nasjai	3.	nasjada	nasjaidau
Pl. 1.	nasjam	nasjaima	Pl. 1.	nasjanda	nasjaindau
2.	nasjiþ	nasjaiþ	2.		
3.	nasjand	nasjaina	3.		

3 例えば、

gaswalt þan jah sa gabeiga jah gafulhans warþ. (Luk. 16, 22)

「それからその金持ちも死んだ、そして葬られる者となった。」

jah was imma gataihan fram ahmin þamma weihin ni saiƕan daupu, (Luk. 2, 26)

「そして彼に聖霊から、主のメシアを見る前に死を見ることはないと告げられていた。」

これらの例を受動態とみなすことができるかどうかは、即断できないがいずれにしても、今日の聖書ではこの個所はそれぞれ受動の過去と過去完了で訳されている。

4 もっともエロームス（H.-W. Eroms）も言うように、動詞のカテゴリーは固

定的な概念ではなく、Tempus、Modus、Passiv といっても自明のものではない。例えば、werden-Futur を時制としてではなく、Modus の領域に移して考察したり、Passiv に関しても受動は werden-Passiv に限定し、sein-Passiv は „er ist gelaufen“ のような sein で作られる能動の完了と関連づけて扱うべきであるとする主張もある。しかしここではそのような議論には踏み込まない。Vgl. Eroms (1990), S. 82.

5 Vgl. Grønvik, S. 11.

6 Vgl. ebd. S. 14f. グレンヴィクによれば、自動詞では元来、場所や状態の変化を表わすもの (mutativ oder transformativ な動詞) だけが過去分詞を作ったのであり、それ以外の動詞は後に完了時称や非人称受動を表わすようになってから作られた。

7 Vgl. Behaghel, S. 201.

8 Vgl. ebd. S. 201

9 Vgl. ebd. S. 200.

10 Vgl. Valentin, S. 9.

11 Vgl. Eroms (1990), S. 85.

12 Vgl. Behaghel, S. 206.

13 Vgl. Grønvik, S. 26.

14 もっとも、この個所はルター訳に基づく今日の聖書では次のように werden の接続法が使われている。

„Unser Vater in dem Himmel. Dein Name werde geheiliget.“

15 Vgl. Grimm, S. 149f.

16 これらの数字はズィーフェルス (E. Sievers) による『タツィアン』の辞書、およびピーパー (P. Piper)、ケレ (J. Kelle) によるオトフリトの『総合福音書』についての辞書から筆者が整理、分類したものである。

17 ベハーゲルはこれを過去分詞の形容詞的用法と見ているが (Vgl. Behaghel, S. 200)、ブラッケルト (H. Brackert) は „Viele von denen, die jetzt noch schwer verwundet danieder liegen, sind dann wieder geheilt“ と訳し、ハットー (A.T. Hatto) は „many who are now badly wounded will have recovered“ と訳している。Vgl. *Das Nibelungenlied*. 1. Teil: Mittelhochdeutscher Text und Übertragung. Herausgegeben, übersetzt und mit einem Anhang versehen von Helmut Brackert. Frank-

furt/Main 1987 (Fischer Taschenbuch 6038), S. 61.
The Nibelungenlied. A new translation by A. T. Hatto, reprinted 1978 (Penguin Classics), S. 45.

18 ベハーゲルはこの他に『アネゲンゲ』*Anegenge*、ヴォルフラムよりあとのルードルフ・フォン・エムス（Rudolf von Ems）の『バルラームとヨゼファート』*Barlaam und Josephat* やコンラート・フォン・ヴュルツブルク（Konrad von Würzburg）の『トロヤ戦争』*Der Trojanerkrieg*、さらに記録文書に現われる用例を挙げているが、ヴォルフラムのこの個所は『中高ドイツ語文法』で、いわゆる標準化された古典的中高ドイツ語の文学に現われる最初の例として挙げられている。

19 Vgl. Eroms (1990), S. 85.

20 Vgl. Eroms (1989), S. 86. エロームスは『パルツィヴァール』の第三巻のすべての定形動詞の数を調べ、そこから作品全体の定形動詞の数を推定し、それに対する werden 形と sein 形の割合を 2.8 %対 3.4 %と計算している。そしてブリンカー（K. Brinker): *Das Passiv im heutigen Deutsch—Form und Funktion*. München/Düsseldorf 1971（=*Heutiges Deutsch* I/2）の現代ドイツ語についての調査結果と比較し、古いドイツ語と今日のドイツ語におけるふたつの受動の数の逆転関係を示している。

21 Vgl. Valentin, S. 12f.

22 Schröbler: §319 Anm. 1. その後の改訂版でも（23版も）この個所はそのまま踏襲されている。

23 クラーマー（Th. Cramer）は „Man sagt von seiner Großherzigkeit, keinem Ritter sei je abgeschlagen worden, was er ihn gebeten habe." ヴェールリ（M. Wehrli）は „Man sagt von seiner Milde, daß keinem Ritter je abgeschlagen worden sei, worum er ihn gebeten habe." と訳している。Vgl. Hartmann von Aue: *Iwein*. Text der siebenten Ausgabe von G. F. Benecke, Karl Lachmann und Ludwig Wolff, Übertragung und Anmerkungen von Thomas Cramer; 2., durchgesehene und ergänzte Auflage. Berlin/New York 1974, S. 89. Hartmann von Aue: *Iwein*. Aus dem Mittelhochdeutschen übertragen, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Max Wehrli. Zürich 1988, S. 295f.

24 Schröbler: §319.

25 シェーファー（J. Schaefer）は „Weine, Jerusalem, man hat dich ganz vergessen.“ ベーム（H. Böhm）は „Jerusalem, nun weine: wie hat man dein vergessen!“ とどちらも能動の現在完了に訳しているところからこの個所を完了とみなしていることが分かる。なお、この用例は自動詞の非人称受動であるが、これについてはまた別の機会に論じたい。
Vgl. Joerg Schaefer: *Walther von der Vogelweide・Werke.* Darmstadt 1972, S. 189. *Die Gedichte Walthers von der Vogelweide. Urtext mit Prosaübertragung von Hans Böhm* [Unveränderter Photomechanischer Nachdruck der 2. Auflage 1955]. Berlin 1964, S. 276.

26 Schröbler: §319.

27 J. Grimm, S. 165.

28 さらに詳しくは、武市　修「„si ist rehte zuo gekêret“ は受動文か」『関西大学文学論集』文学部創設70周年記念特輯号　平成7年3月　209－227ページ参照。

29 Vgl. Eroms (1989), S. 88.

30 Vgl. Eroms (1990), S. 85.